

## かわいい子には旅を!視野を広げる研修制度活用のススメ

芸団協では、文化庁「国内専門家フェローシップ制度」の事務局として、音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の分野でプロデューサー、制作者、舞台技術者等として活動している人が、他の団体・組織で1ヶ月～半年程度の実務研修を行なうことをサポートしている。創造と鑑賞のより豊かな環境整備には、実演芸術に携わる専門人材の育成が鍵となるのだ。

劇場の設備や扱うジャンル、公演の規模によって、公演制作の現場は様々。本制度を利用して普段と違う環境で数ヶ月間研修を行なうことは、どんな発見があるのだろうか?

北海道の帯広市民文化ホールの山邊千尋さん(照明スタッフ/写真左)は、上司の勧めもあり、なんとか1ヶ月半を捻出して応募。研修先のびわ湖ホールは、オペラ公演も企画制作すれば、地域のための事業も多い。「劇場内の安全管理については、すぐに取り入れたいし、作品制作にあたってのスタッフ体制や照明づくりのヒントも得られた。

いつか自分の担当作品で学んだ成果を発揮したい」。研修を通して、次の目標がみえたようだ。

兵庫県立芸術文化センターの萬福倫子さん(演劇制作/写真右)は、世田谷パブリックシアターで研修。世田谷での稽古と公演を経て兵庫でも公演する作品に、稽古の段階から2ヶ月間携わった。「ツアー期間の受け入れただけだと短期間だけど、作品づくりは長いスパン。稽古場対応に加え、並行して動いている準備を手伝うこともでき、担当プロデューサーの細やかな気遣いに学ぶことばかり。この研修を活かして、生まれ育った兵庫ならではの作品づくりに貢献したい」と語る。フェローシップでの経験を種に地域で花開く、そんな可能性が広がっている。

国内専門家フェローシップ制度  
平成29年度の詳細は下記サイトから。

<https://www.geidankyo.or.jp/renkeikoryu>



## 特別支援学校で取り組む日本舞踊のアウトリーチ

「しっかりお顔を見て、心をこめてご挨拶しましょう」。日本舞踊家の花柳大日翠さんが声をかける。東京都の「子供のための伝統文化・芸能体験プログラム」\*の一環で実施したアウトリーチの一角だ。

プログラムは体験と鑑賞の二本立て。浴衣を着て、まずご挨拶。静かな舞、躍動的な踊り、水の流れ、女性らしさ、男性らしさ。いろいろなものに変身できる舞踊の魅力を知る。唄・三味線とお囃子ほかの生演奏に合わせて動きを真似る。最後はプロの実演を鑑賞。

学校を訪れたのは日本舞踊協会の若手精鋭メンバー。演奏も歌舞伎舞台上に立つプロが中心だ。子供たちの実情に合わせてプログラムにも工夫をした。葛飾ろう学校(2/3)では、聴覚障がいのある生徒たちを前に、プロジェクターでテーマを視覚化。全く聞こえない子は少数で、補聴器と手話のサポートで、音にあわせて生き生きと踊っていた(写真)。肢体不自由教育校の八王子東特別

支援学校(2/21)では、ほぼ全員が車いす利用の生徒たち。足を使った動作ができないため、ここでの体験は両手と顔・目の動きに特化。実演は、独特な歌舞伎のメイクを施し、装束を付けるところから。日本舞踊について理解を深めてもらいたい、という一心で考えられた構成だ。

ハンディはあっても出来ることを探す。実演家が子どもたちのホームグラウンドへ赴き、いつもと違う場を生む。プロの姿を間近に、ナマの音を振動として感じる。小さなきっかけが子どもたちの可能性を拓く。さまざまな差別や格差が溢れる現代社会。芸能はそうした課題を超越できる要件となるはずだ。真剣に考え、行動することが未来を拓くことにも通じるに違いない。

\*アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が、2015年度より日本の伝統文化・芸能に触れる体験・鑑賞プログラムを、学校教育と連携した取り組みとして実施。2016年度、芸団協は、日本舞踊、長唄三味線、箏曲、演芸(落語・紙切)の関係協会の協力下で29校での実施にコーディネーターとして関わった。

